

令和 6 年度 燕市総合教育会議 会議録

1 日 時 令和 6 年 1 月 28 日 (火) 午後 4 時 00 分～午後 5 時 00 分

2 開催場所 会議室 301

3 出席者の氏名

市 長 鈴 木 力

教育委員会

教 育 長 小 林 靖 直

教育長職務代理者 中 野 信 男

委 員 斎 藤 純 郎

委 員 小 林 恵 子

委 員 上 田 佳 澄

委 員 渡 邊 愛

4 説明のため出席した職員

教 育 次 長 岡 部 清 美 教育委員会主幹 大 森 亨

学 校 教 育 課 長 和 俊 社 会 教 育 課 長 石 黒 昭 彦

統 括 指 導 主 事 関 根 幸 子

主 任 指 導 主 事 川 口 淳

5 事務局書記

学校教育課 藤 野 聡 他 2 名

6 傍聴人 1 人

7 意見交換

(1) 今後の不登校対策の方向性について

次第 別紙のとおり (2 ページ)

意見交換 (概要) 別紙のとおり (3 ページ以降)

令和6年度
燕市総合教育会議
＜次 第＞

令和7年1月28日(火)午後4時から
会場：会議室301

1 開 会

2 市長あいさつ

3 意見交換

(検討テーマ)

「今後の不登校対策の方向性について」

4 閉 会

1. 開会宣言 午後4時00分

2. 市長挨拶

教育委員の皆様におかれましては、日頃より多大なご協力をいただき感謝申し上げます。前回は「部活の地域移行について」意見交換を行い、今回は「今後の不登校対策の方向性について」意見交換を行う。忌憚のないご意見を伺いたい。

3. 意見交換

「今後の不登校対策の方向性について」

川口主任指導主事が、国（県）の動向、当市の具体的な取組・状況、今後の取組の方向性などについて資料説明を行い、その後に意見交換を行った。

○市長

教育委員会内で不登校対策について、議論しているとは思いますが、これまでの状況、今後の方向性について、ご意見いただきたい。

○委員（斎藤純郎）

燕市では不登校傾向の児童生徒の増加を抑えられているということだが、燕市では不登校傾向をどのように捉えているのか。

○統括指導主事（関根幸子）

不登校傾向にある児童生徒の把握については、他自治体より厳密に捉えている。月に3日以上連続で欠席した場合に、不登校傾向とカウントしている。

○委員（斎藤純郎）

燕市では他自治体と比べて厳密に捉えていて、その中でも増加を抑えられているという状況が、見受けられるので教職員の努力を推察できる。なお、教職員の資質向上のための研修会、事例検討会を実施いただいているが、教職員がひとりで思い悩むようなことがないように、校内での不登校対策委員会などを設け、情報共有を行う対応を検討してもらいたい。

○委員（小林恵子）

不登校傾向の児童生徒は、問題となる原因が個々に異なる。登校しぶりの児童生徒は、保健室が居場所として以前使われていたが、感染症対策のため使えなくなり、小学校では、校長室が居場所として使用されていることが多いと聞く。児童生徒は校長室を「本来居てはいけない場所」として認識している。児童生徒が居心地良く、気楽に立ち寄れる場所を確保してほしい。

現在ではオンライン授業も普通に行われるようになり、受けたい授業はタブレットを利用して自分のペースで参加できる。小学校では、まだ人的配置がなされていないということなので、市で予算を確保して居場所づくりを推進していただきたい。

○委員（上田佳澄）

自分が知りうる範囲の話だが、放送室の奥の部屋で、子どもと先生がマンツーマンで勉強しているところを見たことがある。その部屋は、狭くあまり良い環境ではない。各学校で空き教室を活用し、そこへ教職員を配置し、不登校傾向の子どもたちが過ごす「支援室」のような、入りやすく、遊びに行く感覚の環境を整備して欲しい。

○委員（渡邊愛）

自分を出せる「場所」だけではなく、「人」がいるというだけで変わらと思う。学校生活以外の違う面を放課後児童クラブで見てもらって、様子を聞かせてもらえると嬉しい。

国は、学校に行くことが目的ではなく、学びたい時に学べる環境の整備を推進している。学びたいと思ってくれば良いが、学びたいと思わなければ困る。小学校では、学校に行くことで、どんな学びがあるかを知ることができるので、なんとか学校にきてほしい。安心だけではなく、いろいろな人と触れ合ってどういう時に自分が傷つくのかなど、成長の過程として必要なのではないか。フリースクールなども活用しながら、児童生徒が学び損ねないようにしていけたら良いと思う。

○委員（中野信男）

今の世の中を考えると、誰がいつ不登校になるか分からないし、周りを見てもたくさんいる。燕市で少しでも良い施策をすれば、燕市で育って良かったと本人も含めて思えるはずだ。

経営の勉強会で、脳は無意識に都合の良いつくりになっていると聞いた。「火事場の馬鹿力」が良い例で、本当は重くて持てないものも火事の時には持てるというのは、人間の脳が無意識に、都合の良いようにはたらいっている。

睡眠についてのセミナーでは、夜に時計をみると睡眠不足になると聞いた。夜中の3時に起きた際、その後の6時に起床が必要となると、無意識にあと3時間と思ってしまい、脳が都合の良いようにはたらし、睡眠を妨げてしまうとのことである。

不登校の原因は解明されていないが、おそらく精神的な理由もあると思われるので、将来つきとめられると良いと思う。

NHK「映像の世紀バタフライエフェクト」では、PTSDに関する特集があった。第一次世界大戦時、体が震えて戦える状況じゃないとサボタージュだと考えられていて、イギリス人が見せしめに死刑になった。最近PTSDという病気ということが解り、番組では取り上げられていた。結局、原因が分からない時は、サボタージュなどとされてしまう。不登校傾向にある子どもは、精神的な何か理由があると思うが、現時点ではわかっていない。そういった子どもを幸せにするには、燕市教育委員会事務局として、どう考えているか、即効性がある施策など教えていただきたい。

○市長

教育長から回答をお願いします。

○教育長

燕市は全国平均、県平均で見ても、不登校を抑えているというところで評価したいと考えている。私自身が現場をまわってみて、各校で早めにチームとして適切に対応していると捉えている。

しかし、不登校児童生徒がいけないわけではない。不登校だから悪いというわけではないし、一人一人の成長過程で不登校が必要な時期もあると、前向きにみることが大事だと感じる。先ほど渡辺委員がおっしゃるように、学校でしか学べないこともある。

映画「小学校～それは小さな社会～」では、集団の中で人との関わり方、折り合いの付け方、人のために働くなど、日本の教育の良いところが伝わってくる場面が多い。家庭では、なかなか難しい部分と感ずるので、そういった場所が必要なのかなと考えている。

そこで、先ほど担当が説明した対策として、中学校には居場所を用意しているが、小学校では場所はあるものの、人員がいらないため対応しきれていない。人がいて迎えてくれる場があると良いのかなと感じているので、まずはそこから考える。特に低学年は休み続けると、保護者が仕事を休まなければいけなくなり、それが続くと辞めなければならない、という問題もある。こういった状況を社会全体として考えなければならないと思っている。予算的なこともあるので今日このような意見をいただけたことは意味があると感じた。

○主幹

学校は学びの場であるが、勉強だけではないというような居場所をつくる。最初は、勉強ではなくても学校に来て徐々に1時間、2時間と机に向かって、教室に行けるようになり、いつか社会に出ていく、そういう繋がり場になっていけると良いのかなと感じる。

○市長

ちょっと違った視点で事務局に質問したい。

燕市は教職員が頑張って、数はおさえられているとのことだが、教職員は異動があり、他の自治体にも異動していて、それぞれの自治体で頑張っていると思う。教職員の頑張り以外の別の要素で、他自治体ではしていないことを燕市で行っているから、おさえられていると捉えてよいのか。他自治体でしていない施策を燕市がしていて、もっとすればもっと良くなるということを教えていただきたい。

○教育長

地域コーディネーターを全校に配置していて十数年経過している。地域の方々から学校に来てもらい、教職員のいない所で、放課後学習支援などを通して、児童生徒の支援、対話をさせていただいている。教職員は異動するが、身近にいる地域の方々がずっといてくれることで、児童生徒の安心安定に大きく尽力していただいていると感じる。

○委員（斎藤純郎）

不登校児童の原因は様々で、不登校対策は多様な対応が必要であり、燕市では校内支援として心の教室、校内教育支援センター、SC・SSW の派遣、校外支援として教育支援センター、スマイルサポートステーション、ICT を活用した学習支援など、多様な原因と対策に応じた対応により抑えられていると思うが、他自治体も同じ施策をしているのか、燕市が優れているのか説明をしていただきたい。

○学校教育課長

校外教育支援センターは各地区に 1 か所設置しており、利用しやすい場所になっていてハードルが低い。そこでエネルギーをためて、次のステップとして中学校の校内支援センターへとつながっていき、教室には行けないが、学校に来ることで友達との関わりにつながり、好循環が生まれると考える。小学校にも校内教育支援センターの設置を進めていきたい。

○委員（斎藤純郎）

他市町村と比較して説明していただきたい。

○統括指導主事（関根幸子）

他自治体にも校外支援センターはあるが、市に 1 か所程度がほとんど。燕市は合併前の地区ごとにあるので、児童生徒自身が通いやすい。利用しやすい環境は他自治体よりも優れている。

○主任指導主事（川口淳）

燕市のように SC・SSW の配置が充実しているのは珍しいと感じている。相談できる場所が多いほど多様なニーズに応えられていると考えられる。中学校の校内支援センターの現状は、気軽に行ける場所になっていて、他愛ない会話をしながら、だんだん教室に足が向くようになってきたり、勉強したい子にとっては勉強できる場所として、生徒が通いやすいようになってきているという声も実際に挙がっている。こういった場所を小学校にも増やしていけたら、児童生徒は有難いと思う。

○市長

「施設」や「人」が他自治体よりも充実しているが、さらに小学校単位で充実してくればもっと良くなるという話だということだと思う。それを踏まえて新年度予算を考えていくことになると思うが、数のほかに居場所の中での過ごし方も重要である。NHK ドラマ「宙わたる教室」は、定時制高校の部活で学会に発表するレベルになったという科学部の話で、実話を書籍化しベストセラーとなり、ドラマ化したものである。優秀な姉妹と比較されて自分に自信がなくなってしまい、定時制高校に通うも教室に行けない。そのような状況で、先生に科学部に誘われ、教室には行けないが、部活で活動し、記録をとるという役割を与えられ、それをこなしていくうちに、だんだんと自信が付き、最終的には研究の中心人物として学会で発表するようになったという話である。まずは居場所をつくってあげて、その中でどのように、どのような人と関わっていくのが重要なのではないだろうか。

○委員（中野信男）

そのとおりだと思う。

燕市は具体的には校内教育支援センター、SC・SSWがメインとなっていると思うが、小学校も同じように設置されているのか。

○学校教育課長

SC・SSWは小中学校にかかわらず、必要に応じて派遣している状況である。校内教育支援センターは小学校にはないので、今後設けたいと考えている。

○委員（中野信男）

市長は小学校についてどのように考えているのか。

○市長

新年度予算で協議をしているところだ。

○委員（小林恵子）

校内教育支援センターで相談員、支援員が配置されているが、資格等の条件はあるのか。

○学校教育課長

いずれも教員免許を持っている方を配置している。

○市長

校内教育支援センターを小学校に設置していこうという方向性で予算を協議していこうと思うが、「教育支援センター」という名称は供給する側の名称で、児童生徒目線で考えると、行きやすい場所とはあまり思えない。何か他のネーミングを考えたほうが良いのではないか。

○教育長

「校内教育支援センター」は国が示す呼称で、もし予算が認められたら、このままでは使わない予定である。「エンゼルルーム」などあたたかい、やわらかいイメージのネーミングを、それぞれの学校と一緒に考えていきたい。

○市長

そこにいるスタッフの名前なども良いかもしれない。

○委員（渡邊愛）

私自身の経験で、心の教室の先生が初めて来校した際、「おいちゃん」と子どもたちから呼ばれていたと思うが、部屋でなくとも外で会っただけでも、和やかな雰囲気になっていた。

○市長

名前は大切だと思うので、ぜひ考えてもらいたい。

○委員（斎藤純郎）

各学校の良い名前がつく校内教育支援センターに期待している。ここで学習の支援をしてもらえるということなので、非常に魅力的であると感じる。研究中となっているフリースクールとの連携は、今後研究を進めて、多様なニーズに応えられるようになってもらいたい。

○委員（中野信男）

NHKスペシャル「岐路にたつ東京大学～日本発イノベーションへの挑戦～」という番組で、東大の改革についての話である。AIは進化が激しく、東大のAIの研究の遅れに危機感を感じた松尾先生は、AIについてやる気のある人を募集した。そこに小学校途中から中学校と不登校になり、勉強をしていなかった子どもが研究員として選ばれた。不登校の間、パソコンに熱中し、プログラミングが面白く、実現するために調べていった結果、自分の知識となり、能力や人格を形成していった。その能力を松尾先生に見いだされ、ほとんど学歴がないものの、東大研究室に招かれた。不登校でも悲しむことはないという気がしている。人間はある確率で才能をもった人がいる。それを生かすも殺すも社会と教育だという説明があった。教育が良くないと才能をつぶしてしまう可能性があり、教育の大切さを感じた。また不登校でも悲観することはないと感じた。

○委員（小林恵子）

小学校に校内教育支援センターを立ち上げて、なおかつ予算がつくとなったとしたら、教員免許を持った方を充足できるのか不安である。教員免許にこだわらずに、人間性や放課後学習支援の方でも十分対応できるのではないかと思う。

また、燕市でサポートスタッフのエキスパートとして、専門性を備えた方を育てるのも、将来的に有意義ではないだろうか。その場合、パートタイマーではなく正規職員として、その方が生活していけるような雇用体制を作っていけたら良いのではないか。

○学校教育課長

小学校では教員免許をもっている方が少ないという現状もあるので、教員免許にこだわらず人柄などを考慮し、温かく迎えられ人が担当できるようにしていきたい。発展的なご意見をいただいたので、今後研究していきたい。

○委員（上田佳澄）

ひとつ疑問点がある。分水小学校には、学習支援教室の担当教職員が、各学年に一人ずつ配置しているようだが、多いのではないか。

○教育長

介助員ではないかと思う。

○委員（上田佳澄）

かつては、「さくらひまわり教室」という名称であったが、今は「特別支援教室」に変わっているところに、先ほどの愛称でというようになり、また名称が変わると、違和感を覚えて行きづらさを感じる児童生徒もいるのではないか。渡辺委員がおしゃっていた「おいちゃん」のような「人」がいて、困っている時にいつでも対応できるシステムがあれば、必ずしも教室を作らなくても良いのではないか。教員免許を持たなくても「人」を育てて配置されると良いのではないかと感じた。

○市長

大切なことだと思う。

4. 閉 会 午後5時00分